

研究

縁故の地をたぐねて

— 地図で佐伯史の現地を歩く —

賛助会員 大坂 長谷川 守

昨年来古よつと落ちついたら、佐伯史の関西地方由緒の地縁故の望き、それが今のどこかを、健在な間に探し、つぎとめておきたいと、古い地図をたより求めて来た。それを佐伯の同志の方々に目にかけていといと存じながら、ついでに御無沙汰しております。

先年、毛利高政公の祖、森備前守定（大坂市の大森寺の祖）の居城地であつた、近江の鯨江城をへきとめました。それは現在の滋賀県愛知郡愛東町鯨江の標です。然し以前にもお便りしました様に、この土地の人々もその城趾を知らずに居ります。（以下増村氏の「佐伯郷土史」下巻三頁参照して下さい）

次いで「九郎左衛門高次の代になり長張刈安（カリヤス）に移り、御番所、赤森、古渡の三村を領した」とある。刈安については昨年十一月に尋ねて参りましたが、今日一宮市内に編入されていて、国鉄一宮市駅の西南方向約一キロ半、尾谷鉄道が「刈安駅」を尋ねあてたわけですが、刈安でなくて刈安嶺でありました。

御番所は現在地図にも残っており、名古屋市昭和区御番所町です。

「高政の誕生地」の地名については「永祿二年關東郡荒子莊花菱村で」とありますが、海東郡が正しく、荒子莊は残っているが花菱村はなく、明治初年頃から既になくなつていて、明治十九年の参謀本部の實測地図の原図にも、すでに消滅しています。

然し荒子莊は、豊臣秀吉の誕生地中村（上中村と下中村とあり）より南方、海に近い約四畑一里程の位置に、其の實測図には荒子村と記されていて、今日名古屋市中川区荒子町として残っています。

徳川時代の尾張の古地図にも明かに残っています。一地点から一地点への距離はあてにならないので、明治十九年の最初の實測図を手に入れてやつとたぐりつきました。

秀吉の誕生地と遠くない地点を、高政の誕生地として古来から伝承されている段と、高政が秀吉とのかく近い関係にあつたことはいふかがやけるわけですが、

高政公が初めて秀吉から三千石を頂いた明石郡松の郷（同書二頁）だけは、まだつぎとめられず困っています。ただ朝鮮出征で高政が海中深く叩きこまれた時、これを救つた、明石から連れて来た磯辺のものの、「（發部、同書十頁）から考えて、舟子一萬砂の間の海岸であつたことと事実でしよう。秀吉が高政に瀬戸内の海賊の元締をさせるために、明石郡をよえて明石海峡を守らせたいのではないうか。

高政公の重臣の一人西（のち西名）勝信の父、山城国菱田城主豊田越中守の居城は判明しました。西名一簇揃つて見分する予定で、越中守は一子勝信を高政公に托して、城を出て高野山に上り得度したと云う。

佐伯氏ゆかりの、三重県津市四天王寺には改めて訪問して、大神氏の墓をまもつてもらう様依頼するつもりです。

それから、浪速大坂で立派な業績を残された佐伯の人、山田俊郷先生・岩崎法一先生・中根貞考先生のような方々を書いてみたいと思つています。

（おわり）